

西南グリーが織りなす音楽の系譜

内海 敬三

◇グリークラブ発足

歌うことが好きな中学生、河野博範¹、伊藤俊男²、井上精三³を中心に十数人が教会の礼拝で歌っていたが、関西学院の男声四重唱を聴き、(讚美歌作家、由木康はその一人)その素晴らしさに触発され、自分達も、と評判の美声の持ち主ミス・フルジュム⁴に指導をお願いした。水町義夫⁵も自ら部長になり、このグループをグリークラブと名付け、さらにボールデン⁶を顧問として正式に活動を開始した。1919(大正8)年、赤レンガの講堂(現在の大学博物館)の建築が始まった頃である。

1922(大正11)年ごろ「船頭小唄」⁷などの哀調を帯びた歌が流行っていた時代であったが、彼らは讚美歌やアメリカの百一名歌集⁸をテキストに歌っていた。

同年10月7日、福岡市記念館における「西南学院グリー倶楽部秋季大演奏会」は予想外の盛況で、地方の音楽会としては未曾有の事であった。

続いて大分日田町、翌年5月には北九州への演奏旅行を実施し、第一次世界大戦後の不況の中、彼らの演奏は多くの人々に慰めを与えた。特に飯塚での演奏会は関東大震災の慈善の意味もあり、かつ“初めての音楽会”ということで「会場設立以来初めての大入場者で下駄札が不足して困った」⁹とある。

-
- 1 1926年高等学部神学科卒業、1931年高等学部文科卒業、西南学院大学英文学科教授
 - 2 1925年高等学部文科卒業、中学校、高等学校校長を経て第10代西南学院院長
 - 3 1925年高等学部商科卒業、NHK 福岡放送
 - 4 Sarah Frances Fulghum：アメリカ・南部バプテスト派宣教師、中学で英語と音楽の教師、第4代舞鶴幼稚園園長
 - 5 当時は中学部の教員。1912年東京帝国大学文科卒業、西南学院高等学部教授を経て、第4代西南学院院長。
 - 6 アメリカ・南部バプテスト派宣教師、1922年西南学院高等学部神学科長を経て、第3代西南学院院長。
 - 7 「枯れすすき」としても知られ、大正から昭和まで広く唄われた。
 - 8 百一名歌集：“The One Hundred and One Best Songs” Published by the Cable Company
 - 9 「演奏旅行記」、四十周年記念誌編集委員会、『四十年の歩み—西南学院グリークラブ』、1960年、p 30

◇声楽家 伊藤武雄¹⁰

伊藤は中学時代から音楽の素質を認められ、ミス・フルジュムの指導よろしきをえて、1930（昭和5）年上野の東京音楽学校（現東京芸大）に入学した。

1932（昭和12）年応召、中国の大場鎮の戦場で右手を失う。帰国後、母校東京音楽学校の助教授となった。また当時は片腕の「バリトン伍長」として広く知られていた。

1940（昭和15）年、山田耕筰作曲、「黒船」（日本人初のグランド・オペラ）に山田耕筰本人から請われて出演することになったが、学校、文部省共に許可せず、職を辞し出演した。伊藤はその後、数々のオペラで主役を演じ高い評価を受けていた。

1948（昭和23）年齊藤秀雄、井口基成、吉田秀和等と共に、桐朋の「子供のための音楽教室」を設立、後に桐朋学園大学の設立にも尽力した。桐朋学園にはその功績を記念する胸像がある。また、邦訳歌詞の向上にも貢献し、1976（昭和51）年に勲四等旭日中綬章を受章した。



1919年ごろ、グリークラブ部員（創設メンバー）
左端はボールデン、後列、右から2人目はフルジュム

◇危機と再興

1926（昭和元）年ミス・フルジュムが上原医師と結婚して西南を退職し、グリークラブの主要部員も卒業したので、「これらの人々が学窓を去る前後から音楽部の別名は西南学院ストリングオーケストラとなり、（中略）学院の音楽部からウタが除外

10 1927年高等学部文科卒業。

されて」¹¹しまった。これが残念だと15、6人が集まって歌っていたところ、日頃交流のあった福岡 YMCA の内海孝夫主事¹²に指導をお願いし、やがて、八幡バプテスト教会で演奏をするまでになった。「何ととっても有料音楽会だ。味噌をつけたら大変だと思っていたが内海氏の指導よろしきを得て無事初舞台を切り抜けた。その上数箇の花束さえも送られて満場聴衆の拍手のうちに再興グリークラブの処女音楽会をおわった」¹³。当日のメンバーには藤井泰一郎¹⁴、徳永麟之助¹⁵、尾崎主一¹⁶等がいた。

◇福岡初の混声合唱団

満州事変の不安定な時代、グリークラブの指揮をしていた徳永麟之助（第33代指揮者）は福岡にも混声合唱を、と男声は九大と西南、女声は市内の女学校の教師を主たるメンバーとして福岡混声合唱団を創設した。福岡最初の混声合唱団であった。1937（昭和25）年福岡市記念館での演奏会当日は激しい雨にも拘らず、ほぼ満席の聴衆であった。しかし徳永自身も、また他の重要なメンバーも相次いで就職、転勤したため解散した¹⁷。

◇ライラック合唱団

グリークラブの指揮者の松本省一¹⁸は、在学中の1939（昭和14）年12月に混声合唱団、「福岡ゲミッシュテン・コール（Gemischten Chor）」を設立した（翌年1月に「ライラック合唱団」に改称）。総勢20人、男声メンバーはほとんどが西南の学生であった。日中戦争の最中、会場には夜間照明もなく、練習は日曜の昼に行っていた。

英語は敵性語と言われ、団名は「ライラック合唱団」から「福岡混声合唱団」に変わった。戦争は激しくなり、空襲警報が発令されて練習を中止することもあった。

11 前掲『四十年の歩み—西南学院グリークラブ』、p 41

12 同志社グリークラブのOBで、筆者の父親。

13 前掲『四十年の歩み—西南学院グリークラブ』、p 41

14 1928年高等学部文科卒業。1931年西南学院中学部教員として就任し、その後、高等学部、専門学校、大学文商学部教授を経て短期大学部長。

15 1931年高等学部文科卒業。RKB 毎日放送取締役、福岡女学院理事長のほか福岡合唱協会会長。

16 1927年高等学部文科卒業。1930年高等学部神学科卒業。その後、西南学院バプテスト教会牧師などを務め、西南聖書学院初代院長。

17 徳永麟之助、『よろこびの歌』、2002年

18 1941年高等学部高等商業科卒業。九州のアマチュア合唱団のリーダー的存在。

やがて、演奏会は困難になり、渡辺鉄工所（飛行機の製作所）の慰問演奏会を第5回定期演奏会とした。さらに7月に計画していた第6回定期演奏会も1945（昭和20）年6月の福岡大空襲で中止になった¹⁹。

男声メンバーは次々に軍隊に招集され、信時潔作曲の「海ゆかば」²⁰を涙と共に歌って送り出した。男性はいよいよ少なくなり、解散しようという声が出たが、女性たちは「戦争は何時の日か必ず終わります。男性が戦場から戻って来るまでライラックの灯はともし続けます。」と答え、西南の赤レンガの講堂で練習を続けたという。

◇合唱は「軟弱」

「時あたかも軍国主義の台頭と相待ち、運動部重点主義となり、グリークラブの如きは軟派的或は女性的のパーティーと做され」²¹て、配属将校の「合唱部は廃止すべきである」との意見に、教授会も了承しようとしたが、部長の笹森史郎は「部員には航空兵志望の者が多いが、合唱は飛行士にとり大切な聴力を鍛えるのに有益である」と主張し、グリークラブは廃部を免れた。

◇最後の演奏会

いよいよ学徒出陣が決定されるという1943（昭和18）年9月に入隊が決まり、卒業式は半年繰り上がり8月になった。結局、第9回の演奏会は暑い盛りの方7月に会場は冷房もない赤レンガの講堂で実施した。

その前年には首都東京はアメリカ陸軍航空軍中佐のドーリットル（Doolittle Raid）による日本本土に対する初めての爆撃を受け、福岡でも警戒警報が発令されたという時で、当日のプログラムには「警報発令の際は新聞に記載す」とある。空襲で演奏会の中止もあるというのである。にもかかわらず、当日の写真には満席の聴衆である。

19 第4回定期演奏会 於：福岡市記念館 指揮：内海洋一、警報発令の際は29日に延期の旨表示し演奏会開催

第5回定期演奏会 於：渡辺鉄工所 指揮：内海洋一、慰問演奏会をもって定期演奏会となす

第6回定期演奏会 6月18日夜 福岡空襲のため開催不能、前売券払い戻し等行方（ライラック合唱団OB会、『むらさき・はしどい 五十八年のあゆみ』、1998.12.25）

20 「海ゆかば水漬く屍 山ゆかば草生す屍 大君の辺にこそ死なぬ かえりみはせじ」玉砕を伝えるラジオ放送の際に流された曲

21 前掲『四十年の歩み—西南学院グリークラブ』、船越義雄（1930年高等学部商科卒業。第2代指揮者）、p55



グリークラブ最後の演奏会 (1943.7.10)

メンバーも聴衆もこれが最後の演奏であろうと予想していたからであろう。井上良助（1943年高等学部卒業）の指揮で、ステージの大きな日の丸を背に、彼らが最後に歌ったのはグノー作曲の「兵士の合唱」²²であった。「拍手なり止まず更に追加された（アンコール）曲目チェコスロバキヤの軍歌“戦線へ”²³には又も絶賛の拍手が送られ、斯くして十時近くに非常なる盛況裡に幕を閉じた」²⁴と学院新聞は報じている。入隊を前にして彼らは演奏会後も去り難くメンバーはピアノの周りに集まり、「こうして皆で歌う日がまた来るだろうか」と涙を浮かべる者もいたという。

さらに、「会場を出た後も彼らは「ウ・ボーイ」や「いくさびと」など歌いながら、西新から天神まで歩いて行った。こうして万感の思いを込めて歌う若者の歌は夜更けの福岡の街に響き渡った」のである。（今村正仁談：1943年高等学部卒業）

さらに、女性たちも彼らとともに歩いて行ったが、夜更けのことで何人かは提灯を灯していた。彼らの歌声は「今でも耳に残っている」という。（井上志麻子談〈井上良助夫人〉）

1945（昭和20）年8月15日、ついに戦争は終わった。男声メンバーは次々に復員し、終戦の翌年、赤レンガの講堂で戦後初めての演奏会が松本省一の指揮で行われた。創立から7回目の演奏会は期待に膨らむ聴衆で満席であった。団員は再び合唱が出来たと感涙にむせんだ。松本は1997（平成9）年合唱団解散まで指揮者を務めた。

22 オペラ「ファウスト」の男声合唱で、戦いが終わって「永き戦い今や収まりて懐かしき我が故郷に帰り着ぬ」という故郷に向かう兵士の歌。

23 「U Boi（ウ・ボーイ）」として男声合唱団に愛唱されているこの歌は、クロアチアの愛国歌で、当時はチェコスロバキアの歌とされていた。

24 『西南学院新聞』第60号、1943年7月25日発行

◇「いくさびと」とネアン・デルタール人

「いざ起て、いくさびとよ」は、当時のグリークラブ部長藤井泰一郎が日本語に訳したもので、「いくさびと」として全国の合唱団によって広く愛唱されていて、2015年2月の東京マラソンの開会式では「いざ立て、アスリートよ」と歌詞を変えて歌われるほどである。原詞はルーテル派のドイツ人牧師ユストウス・ファルクナー（Justus Falkner）によるもので、今日日本のルーテル教会で「主イエスにつらなるつわもの立ちて」という歌詞（教会讃美歌463番）で歌われているが、曲は神学者で讃美歌作家としても有名なドイツ人ヨアヒム・ネアンダー（Joachim Neander）によるものである。

ネアンダーはルッセルドルフの渓谷で讃美歌を作ったり、集会をしったりして広く人々に敬愛され、彼の業績を讃えてその渓谷はネアンダーの谷、即ちネアン・デルタールと名づけられた。ところが、そこから古代人の人骨が発見され、一躍世に知られるようになった。これが「ネアン・デルタール人」である。なお、ルッセルドルフにはネアンダーの記念教会がある。

現在、我が国の合唱団で歌われているリズムカルな曲は、アメリカの福音讃美歌作家マック・グラナハムによるもので、教会で歌われているネアンダーの落ち着いた原曲とは異なる。このように一つの歌詞に、ドイツとアメリカの各々の国民性を表すような2つの異なった曲がつけられているのである。

このマック・グラナハムの曲は戦前から同志社や関西学院で歌われていたが、英語であるため戦争中は歌われなくなった。しかし西南では、藤井泰一郎の日本語訳で戦争中も歌い続けられ、今日に至っている。この歌は彼の日本語訳がなかったならば戦争中の英語排斥の風潮のなかで、永久に忘れ去られていたであろう。

◇カチューシャで「復活」

戦争が終わり、いがぐり頭に軍服、軍靴といういで立ちの学生に藤井泰一郎はグリー再興の話をした。早速、松本信義²⁵と石田昭²⁶の両名が募集のビラを貼ると、10人ほど集まった。しかし、合唱経験のない者も多く「他のパートは聴くな」と言われながら練習をつづけ、1945（昭和20）年のクリスマスにおいて初ステージで歌ったのは「胸のただ中」「権平が種まく」の2曲、わずか4分間の演奏であった。

25 1948年経済専門学校卒業。

26 1947年経済専門学校卒業。

その頃、先輩の経営する音楽事務所に一人の青年が立ち寄った。若干23歳の石丸寛²⁷であった。彼が合唱の経験があるというので、早速グリーの指導を頼んだ。この新進気鋭の石丸の指揮で、1947（昭和22）年、グリークラブは戦後第1回西部合唱コンクールに出場、優勝した。彼らが歌ったのは石丸編曲による「カチューシャ」で、彼が東京のソ連大使館で兵隊達が歌うのを聞きとり「村の娘カチューシャ祭りの赤き花」の歌詞をつけたものであった。トルストイの小説ではないが、ロシア民謡「カチューシャ」でグリーは戦後見事に「復活」を果たしたのである。

その後のロシア民謡ブームで「カチューシャ」は「りんごの花ほころび…」という関鑑子の訳詞で歌われたが、石丸の「カチューシャ」はその先駆けであった。

◇石丸寛と福永陽一郎

1950（昭和25）年、当時の指揮者は石丸寛、ピアノ伴奏は福永陽一郎²⁸で、その後両者共に日本の音楽界の重鎮となり、今では考えられない黄金コンビであった。

翌年、関西学院グリークラブとの交歓演奏会で西南グリーが歌ったのは「フォスター・メドレー」であった。それはメンバーの進藤邦彦²⁹、毛屋禎吉³⁰、長弘³¹といったソリストを駆使した石丸による編曲で、それは柔らかなハーモニーの関西学院グリークラブを意識したものであった。当時からメンバーは「西南独自の合唱とは何か」を熱く語り合っていた。

◇オペラとフォー・コインズ

福永は在校生を中心として演奏会形式ではあったが、数々のオペラを上演、また「西南カレッジエイト・コラル・ソサイエティ」を創立、その福岡最初のヘンデル

27 文化学院大学部芸術科卒業。指揮者、画家。福岡の合唱の育成に貢献。九州交響楽団結成、上京後、指揮者として活躍、黛砥敏郎等と共に「題名のない音楽会」を立ち上げた。特に「5000人の第九」は有名。「ゴールド・ブレンドコンサート」や「日曜美術館」等多くのテレビに出演した。

28 1944年中学部卒業。指揮者、音楽評論家福岡歌劇研究会創設。1951年、藤沢市民オペラ創設。1952年本邦初のプロの男声合唱団、東京コラリアーズ創設。アマチュア合唱団の育成に貢献し、藤沢オペラコンクール最高優勝者には「福永陽一郎賞」が与えられている。藤沢市民オペラの生みの親として、没後25周年の2016年1月に偉業をたたえる記念碑が建てられた。

29 1953年大学文商学部英文学科卒業。

30 1951年専門学校英文科卒業。

31 1953年大学文商学部英文学科卒業。

のメサイア全曲演奏は特筆に値する。進藤と毛屋は卒業後、ダークダックスにつづくプロのカルテット、「フォー・コインズ」のメンバーとして活躍していたが不幸にも進藤が交通事故で亡くなり、止むなく解散した。その後、長は日本コラリアーズのソリストとして活躍した。

グリークラブは指揮者の石丸が上京したので、学生指揮で再出発することになり、進藤邦彦の指揮で第4回コンクール西部大会に出場、第1位（全国大会は5位）となる。つづく第5回西部大会でも筆者の指揮で1位となり、全国大会では3位入賞、以後小嶋八郎³²、山崎恒邇³³、志渡澤亨³⁴等と九州大、福岡教育大を抑えて全国大会に連続出場し「合唱の西南」は全国的にも知られるようになった。



「フォー・コインズ」のメンバー
後列左、進藤、前列左、毛屋

◇岸川 均

岸川³⁵は、学生時代にグリーの指揮をしていたが、KBCに就職後はアマチュア・ミュージシャンの登竜門のラジオ番組「歌え若者」のディレクターを務めた。その番組を足掛かりに数々の人気バンドを送り出し、TNCテレビ西日本の藤井伊九蔵³⁶と共に、福岡を「日本のリバプール」（ビートルズの出身地）と称せられるまでにした。またラジオの伝道番組「新生タイム」のディレクターとしても、指揮者の森川和子³⁷

32 1956年大学商学部商学科卒業。

33 1956年大学商学部商学科卒業。

34 1957年大学文学部英文学科卒業。

35 1962年大学商学部商学科卒業。

36 1953年西南学院高校卒業。

37 1951年西南学院専門学校英文科卒業。後に西南学院大学文学部教授。

を支えて讚美歌合唱の放送を続けた。

天神のライブ・ハウス「昭和」から、夢を抱き上京した若者達が、下積みの苦しい思いをしていたとき、彼は度々電話で助言と励ましを与えていたという。

2006（平成18）年11月、岸川の葬儀の際のさだまさしの弔辞をはじめ、多くのミュージシャンからの花輪もさることながら、甲斐よしひろ（甲斐バンド）が西日本新聞の音楽担当記者吉田浩³⁸にみじくも語った「岸川さんは神様です」の言葉に彼の人となりが見られている。

◇西南シャントゥール

1954（昭和29）年、卒業しても歌をつづけようとOB合唱団を作ることになり、筆者と同期の乙藤成美³⁹をマネージャーとして、一般の男声合唱団「西南シャントゥール」（フランス語で「歌う人」の意）を創設。西部合唱コンクールに出場し、伝統を誇る福岡合唱団を破り1位、全国大会でも3位に入賞した。新聞の評は以下のとおりであった。「一般の部の西南シャントゥールは初出場ながら、関西代表の中央合唱団と争い僅差で3位となったのは惜まれる。課題曲、随意曲ともに1位の実力と認められた審査員も数名あった。その数は2位の中央合唱団よりも多かった」。関西の雄、中央合唱団との比較である。メンバー一同大いに気をよくした。

2014（平成26）年60周年を迎えたが、その間、指揮者は志渡澤亨、馬頭経明⁴⁰を経て、現在は徳永和田彦⁴¹、佐藤棟也⁴²の指揮で活動を続けている。メンバーも60名を超え、アクロス福岡シンフォニーホールでの演奏会は常に3階まで満席となり、福岡の他の合唱団には見られない集客力である。創立以来の聴衆という高齢者もいるが、それは60年間多くの市民に支えられてきた証左であろう。

38 1963年大学文学部英文学科卒業。

39 1954年大学商学部商学科卒業。

40 1959年大学商学部商学科卒業。

41 1961年大学商学部商学科卒業。

42 1970年大学文学部外国語学科フランス語専攻卒業。



西南シャントウール60周年記念演奏会（2014.12.6）

◇グリークラブ再開

近年、部員が次第に減少し、2006（平成18）年には遂にゼロになった。OB会長刀根亨一⁴³、河野正海⁴⁴は勧誘の看板を作成したり、新入生に自ら直接働きかける等の懸命の努力の甲斐あって、メンバーも少しずつ増え、現在は約15人で練習をつづけ、2016年は5回目の演奏会を開くまでになった。今後の飛躍が期待される。

43 1948年経済専門学校卒業。

44 1963年大学商学部商学科卒業。